



「乳児の主体的な姿を支える保育と環境」

講師・京都府幼児教育センター

架け橋期コーディネーター 大橋美智子先生



- *生活を紡ぐのは子ども自身。
- *子ども自身が気づく環境をつくろう。
- *直接的な声かけじゃなく、子ども自身が気づける声かけをしよう。
自分で感じて、考えられるように。

*保育者の援助のあり方➡子どもの姿を丁寧に見とる(深く“視る”)。すると、子どもの学びの姿に気づく、学びにつながる。待つ、見守る、環境の在り方を考える。

*3つの「みる」➡①ただ見る ②この子らしさを見る(昨日と違う今日、苦手だったけど…
こういうのが好きよね) ③じゃあ、次はこういう風にしたらどうだろうと、未来を見る

*主体性を育てる保育(教育)とは

- ➡主体性とは、好きなことだけをする、嫌なことは避けて大人の話も聞きたくなかったら聞かなくてもいいという「自分本位」ということ???
- ➡主体性とは、生活や遊びの中で環境に自ら働きかけ、「もっと面白くしたい」「もっとよくしたい」と心を動かし、そのためにどうすればいいかを自分自身で考えること、時には「今は我慢すべき」と考え直し、よりよい方向に向かって自分で選択し、行動する姿勢や力のこと。

*子どもの主体性(子どもの興味関心に沿った暮らしと遊び)と

保育者の意図(活動が生まれやすく展開しやすい環境を構成)をバランスよく絡ませていこう。

